北九州歴史文化遺産　第五十二回

空を飛ぶ少年の夢
世界に先駆け八頭良一 切り開く

アメリカ（米国）ライト兄弟がプロペラ機による初飛行に成功したのが明治36年（１９０３年）12月17日。本年から１２０年前。ところで日本ではその10年前、鳥の飛行に興味を魅かれて人工の飛船を実現しようと旧制の県立豊津中学校（現みやこ町豊津）を中退し、本格的研究を始めた当時16歳の八頭良一（やず）という少年がいた。その夢が実現する直前、彼は彼方に旅立ったが、その夢、希望、努力は日本の航空界の先駆けとなり、日本社会、人の成長、発展の一助となった。

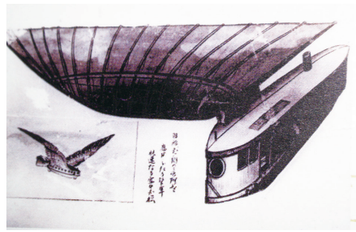
空中飛船の考案ほか自働算盤の開発などを行った八頭良一（北九州市立文学館提供）

八頭が生まれ育ったのは築上郡黒土村（現・豊前市）で、後の岩屋村長の父道一、母タミの長男として１８７８年（明治11年）出生。小学生頃から鳥、その飛ぶ姿に異様な程の関心、興味を抱き、１８９０年（明治23年）豊津中学校に入学。ここで鳥の生態観察、探求を深め、人による飛行機械の発明を志した。やがて「机上の教育だけでは真理は掴めぬ」と3年時を終えて中退し、鳩が多いという大阪に研究に旅立った。

ここで米国人宣教師と知りあい、また彼の紹介で英国人から数学や物理学を学んだ。１８９９年(明治32年)、脚気にかかり徴兵検査受けもあって大阪から帰郷、岩屋村長だった父の仕事を手伝うかたわら、鳥類飛翔理論の論文作成、空中飛船の研究を重ねた。その合間、当時の計算に使う算盤は不便だとしてより効率的な自動計算機の開発も手がけ、「自働算盤」を発明するなどした。

森鷗外との出会い、良一の飛躍を支援

この時である。当時、小倉第12師団軍医部長として小倉に赴任していた森鷗外と出会ったのは。きっかけは当時の福岡日日新聞（現西日本新聞）主筆高橋光威に、開発した自働算盤や飛翔原理の自作論文を示して飛行体実現に協力を求めたこと。高橋はその熱意、成果を称賛して、飛行体は軍事部門にも関係することとして軍医部長の鷗外を紹介。１９０１年（明治34年）２月22日、良一は小倉に鷗外を初訪問。鷗外も彼の努力、研究成果を大いに称賛し激励。これを機に、鷗外は東京大学の専門家を紹介して良一の研究を手助けし、大学側も学内研究室を良一に開放した。


八頭良一が考案した空中飛船の図（北九州市立文学館提供）

良一はここで研究を深め、さらに自働算盤の特許を申請。１９０３年（明治36年）、特許を得るや東京で八頭商会自働算盤販売部を創立して生産、販売。その性能の良さから1台２５０円で２５０台が直ちに売れ、飛行機研究の費用につぎ込むことが出来たという。翌年には、やはり自ら開発した早繰辞書も初版１０００部を発売。これらの資金で１９０５年（明治38年）、飛行機模型の試作に着手した。28歳だった。当時、限りない時間、労力を費やしていた影響で肋膜炎を発症、一時、別府・鉄輪温泉で療養していた。小康を得たので模型を持って再び上京。

それを知った元老井上馨、貝島太郎（筑豊の炭鉱王・貝島太助の弟）、柏木勘八郎（行橋の豪商）らの出資を受けて１９０７年（明治40年）東京・小石川区雑司ヶ谷に飛行機製作工場を設立、試作を始めた。

サブ森鷗外が八頭良一の死を悼み、遺族に送った「天馬行空」の書（北九州市立文学館提供）

製造する機体は空中飛行船

良一が研究、製造しようとしていたものは、彼が同年、福岡日日に掲載した「空中飛船研究の必要」という文で明記している。それによると、「いわゆる空中飛行船で、風に逆らっても迅速に進行し、堅牢で負担力が大きいので、これこそ虎に翼を附けた様なもので、天下此の位恐るべき武器、此の位便利な交通機関はあるまいとして、現今、欧州の軍事界及び交通科学界に於いて研究の主題になっている」とし、「すなわち空中飛行船とは気球に自働装置を施したものの総称で軽いガスで浮かび、起動機でプロペラ、翼を急施して空中を飛行する」と説明する。

そして最後に「この研究が国家の最も重要事なることを世人に鼓吹するのは極めて必要なることと信じます」と訴えている。

その1年後である。病気再発、あと6～7か月後には試験飛行を行えるという１９０８年（明治41年）10月16日、31歳の生涯を閉じた。没後、父道一は遺言書で、良一が死の間際、「死は天明なれば致し方之無き。然れども我は（中略）此事業ヲ我国家ノ為、人類ノ為成功ヲ期シテ高恩ニ報イントス」と述べて息絶えたことを記していた。我が国で初めて代々木練兵場で公式飛行が行われたのは、その2年後である。

これら良一の姿を見守り、支援し、自らの家族にも友人学者にも彼への援助を要請していた鷗外は彼の没後、遺族に「天馬行空」の自筆書を送っている。中国・元の漢詩人・劉廷振が使った自由闊達に道を行くという語。良一への称賛と惜別の想いがにじんでいる。八頭良一について地元豊前市の文化財保護審議会委員長など歴任の尾座本雅光さん（76）は「若くして大きな夢を持ち、飛行への情熱を燃やし続けた。現代の若者にも通じることで、彼から学ぶべきことも多いだろう」と話す。豊前市と近辺からは戦前から、水上飛行機操縦の第一人者と言われた藤本照男、初期女性飛行士として異才を放った木部シゲノら多くの優れた航空関係人材が育っている。これも八頭良一の影響なのだろうか。

シニアスタッフ　村田和夫

今回の歴史文化塾は感染予防のため中止致します。